



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学

HU

2011年  
3月発行  
Vol.8

# 教育GPニューズレター

Hokkaido  
Information  
University

## 巻頭言

### リングつながり

情報メディア学科長  
藤井 敏史

#### FDのリング

FDの定義や受け止め方は人それぞれであり、また時代によっても変化している。しかし、その目指すところが「授業改善」である点については異論を挟む余地はないと思われる。教育に関わる者であれば、誰もが望むことである。そのFDの活動イメージを表現するものとして図1に示すPDCA (Plan, Do, Check, Action) サイクル (リング) がある。しごく当然な作業の流れであり、これを繰り返すことで授業がよりよい方向に向かうことは誰もが納得するところである。しかし、現実には人は忙しさにかまけて、本来なすべきことを先送りにしたり忘れてしま



図1 FDのリング

う。FD活動はそれを回避する手段であり、授業改善への思いを呼び覚ましてくれるきっかけとなっている。よくできたしくみである。

#### 教員と学生を結ぶリング

教育の対象は学生であり、学生なしにFDはあり得ない。したがって、学生から日々の授業に関する

声を集めて分析することは極めて重要である。現在採られている手段はアンケートであり、学期末に一斉に実施する授業評価アンケートや教員が独自に実施するものがある。そこで集まるデータが貴重な情報源であることは言うまでもない。しかし、文字による質問・選択肢あるいは文字による回答、さらには多様な学生の回答を集約した結果であることを考えると、教員に届くのは幾重ものフィルタを通した学生の声である。決して学生の生の声ではない。そこからの確かな情報を抽出することは極めて困難である。

2009年12月、本学に学生FDを実践する10名弱のグループが誕生した。学生FDとは、学生の参画を得てFDをより実りあるものにしようというものである。他大学においては、既に学生の自主的活動によって授業改善につながる学生の生の声が収集されている。発足当初はぎこちなかった本学の学生FD活動は、札幌や京都で開催された学生FDサミットなどに参加する中で次第に活性化され軌道に乗り始めた。図2に示したように、教員と学生を結ぶ太いリングとして機能することが期待される。



図2 教員と学生を結ぶリング

#### 現在と過去を結ぶリング

具体的な授業改善の方法を検討しているとき、気が付くと「温故

## 目次

1. 巻頭言..... 1
2. 平成23年度からの新しいカリキュラム
  - ・平成23年度の新カリキュラムについて 3
  - ・教養教育..... 4
  - ・先端経営学科..... 6
  - ・システム情報学科..... 7
  - ・医療情報学科..... 8
  - ・情報メディア学科
    - メディアデザイン専攻 9
    - メディアテクノロジー専攻 10
3. GPA導入による成績評価の考察 11
4. 教育アドバイザー制度の試行について 14
5. FD活動 行事(実績・予定) 16
6. FD委員会WGの活動実績 16
7. 編集後記..... 16

知新モード」と名付けた状態になっていることがしばしばある。学生のときに受けた授業を思い出し、その中に授業改善のヒントを探している。図3に示すリングである。技術が進歩して使える手段は変わっても、方



図3 現在と過去を結ぶリング

法論は共通である。ありがたいことに、小学校から大学まで、候補となる複数の先生の授業を対象とすることができる。その中で、真っ先に登場するのは決まって高校時代の担任で、物理を教えていただいたS先生の授業である。波の性質を扱う授業の中で、S先生はテレビ放送のことを語り始めた。テレビ局から発信された電波が教室にも届いていること、電波の速度とテレビ電波の周波数を使ってその波長を計算し、それがおおよそどの程度の長さであるのかを身振り手振りを交えて示してくれた。教科書に載っている説明や式だけでは得ることができないものを伝えてもらった。見えないはずの電波が見えた。さらに話は電波にテレビ信号をどのように乗せるのか、それを如何にして取り出すのかと展開した。後半の話にはついて行けなかったが、電波の存在とそのイメージが強く印象づけられた。授業で扱っていることが、技術の最先端につながるものであると感じて物理や科学への関心が一挙に高まった。この体験が私の授業の手本になっている。

#### ペーパーリング

S先生は高校を退職された後も、「青少年のための科学の祭典」を主催し、その中でサイエンスショーを担当されるなど現役の教育者として活動されている。今年、S先生への年賀状には図4に示すペーパーリングというパズル<sup>[1]</sup>を貼付けた。このパズルは1年半ほど前にパズル愛好家の大会で事前の例題の1つとし



図4 ペーパーリング

で登場した。シンプルな見かけながら、そこには不可能な状況が構成されていて、「近年の傑作」としてパズル界を震撼させたものである。図4はそれを別のパズル家がハガキなどに貼れるようにアレンジしたものである<sup>[2]</sup>。パズルは2枚の紙(図では黄と青)で構成されていて、問題文は次のとおりである。「四角な紙(青)に切れ目があって、そこに輪の形の紙(黄)が図のように通っています。紙の輪は、ぐるっと回してみても切れ目はどこにもありません。いったいどうやってこれを作ったのでしょうか?」。私自身はあれこれと思考実験してみたがいっこうに解ける気配がなく、最後に紙を使って考えてようやく解に到達できた。解くのに数ヶ月を要したくなるほどと感心するパズルであった。良いパズルに出会うとそれを誰かに出題したくなる。候補者の筆頭がS先生であったというわけである。先生がどのように反応されるのか興味津々であったが、それを知るのは1年後の年賀状かあるいはいつかクラス会で顔を合わせるときかなと思っていた。しかし、その機会はすぐに訪れた。なんと、元旦の夕方にS先生からのメールが届いた。「年賀状ありがとう。水面できれいに剥がれカラクリ発見」。答えを求めて一直線に突き進むS先生の変わらぬ姿勢を見せつけられた。いつまでたっても師は師である。

#### CANVASが強化するFDのリング

本学では教育GPの支援を得て「ICTによる自律的FD推進モデル」を具現化するCANVASを開発している。これまでに3回ほど学外の催しでデモ展示をする機会が

あった。そのときに来訪者からは「そこまでやるのか」という半ば呆れ、半ば感心した声を数多く聞いた。それらの声を聞くにつけ、改めて本学の取り組みが画期的なものであるとの思いを強くする。なにしろ、FDで扱うあらゆるデータを記憶し必要なときに利用することができ、授業の様子を自動録画していつでも自分の授業をチェックすることができ、FDに関わる活動タイミングやアドバイスまで提供してくれるのだ。また、自ら開発しているので、使いながらより良いものに仕上げることができる。図5に示すように、CANVASが支える強力なFD環境が構築されることになる。

約1年半前、本ニューズレターVol.1(2009年6月発行)の編集後記を依頼されたときに次のように書いた。「本学の学生を含む開発部隊により、FD支援システム(CANVAS)は着実に姿を現しつつある。試行版の運用が間近に迫っている」。現在、CANVASは見事に成長を遂げて、2011年度から本格的に活用されようとしている。検討・開発・評価に関わったすべての方々に敬意を表したい。



図5

#### CANVASが強化するFDのリング

#### 参考文献

- [1] パズル解き大会・例題3・ペーパーリング(2009/9/26), <http://puzkai2009.seesaa.net/article/128892202.html>
- [2] Paper Ring (2009/12/01), [http://puzzle-of-mine.at.webry.info/200912/article\\_1.html](http://puzzle-of-mine.at.webry.info/200912/article_1.html)

## 平成23年度の新カリキュラムについて

教務部長・FD委員会WG8  
富士 隆

グローバル化の進展が意味するものとは？

イチローがメジャーリーグで活躍し、日本車が世界中を走っているように、今は、地球規模でヒト、モノ、カネ、そして情報の移動が活発化している。そのようなグローバル化が進展している中で、世界の国々は、21世紀を生き抜くために、いかにグローバル人材を育成し、活用するかの競争を繰り返している。

イチローが世界に通用し、日本車が世界に通用するように、世界に通用する教育力が求められている。「どこの大学を卒業したか」より、「何を修得したか、何ができるようになったのか」が重視され、問われることになる。そのためには、明確な教育目標と、修得すべき知識・スキルを具体的に提示し、体系的なカリキュラムの編成、実施、そして厳格な成績評価を行うことが大学生生き残りの条件となる。

カリキュラム・アドバイザーボードからの提言

本学では、平成20年度に9つのワーキンググループ（WG）からなるFD委員会を設立した。その中のWG8（カリキュラムディベロップメント）は、企業や病院における経営、情報、メディア及び医療等の分野で高い識見と経験を有する識者を委員とする「カリキュラム・アドバイザーボード会議」を設立し、本学のカリキュラムが社会のニーズや情報技術の進展に適切に対応しているかをレビューすることで、時代を先取りしたカリキュラムの開発をミッションとしている。



カリキュラム・アドバイザーボード会議の様子

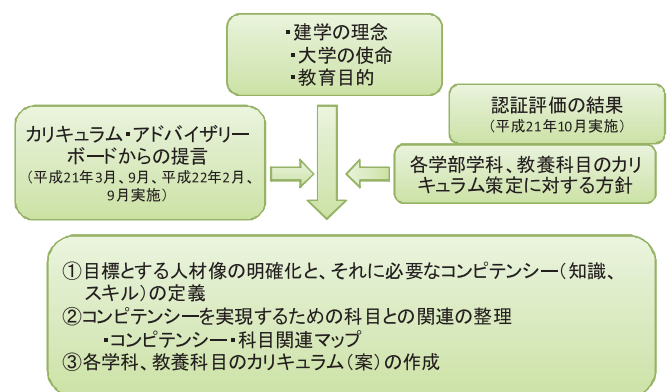
ボードメンバーからの提言の中で、カリキュラム編成の基本スタンスになったものが、「目標とする人材像とスキル像の明確化」である。このことは、グローバル化の進展でも求められている「何ができ

ようになったのか」、「明確な教育目標と修得すべき知識・スキルの提示」と共通している。また、各学部学科共通の提言として、「コミュニケーション能力の養成」、「英語力の強化」、「情報倫理、企業倫理等の倫理教育」があげられ、新カリキュラムに反映されている。

コンピテンシーに基づくカリキュラム編成

カリキュラム見直しの基本方針は、建学の理念や大学の使命等から「目標とする人材像と、それに必要なコンピテンシー（知識・スキル）」を明らかにし、そのコンピテンシーを実現するために必要な科目を決めることとした。

### カリキュラム見直しの方針



### コンピテンシー・科目関連マップ

授業科目	科目新設の検討？				
	CP1	CP2	CP3	CP4	CP5
abc学	○				
efg学		○			
hij学				○	
hij学					○
xyz学					
.....					

科目内容の整合性？

科目の必要性？

この基本方針のもと各作業は、各学科と教養協議会（平成22年度から共通教育協議会）で進められ、その中で、外部アドバイザーからの提言や認証評価での指摘事項（CAP制への対応等）などを取り込みながら原案をブラッシュアップしていった。平成22年5月の両学部教授会で、平成23年度カリキュラムとして審議、承認され、その後、各学科と共通教育協議会で確認、検討作業が必要に応じて進められた。

## 共通教育の新しいカリキュラム（23年度）

教養部長 加藤 喜久子

すべての学生が履修することになる共通教育は、大学における学びのための基礎教育とともに、専門の勉強を通して深められるが社会にでてからさらに磨かれる必要がある、幅広いものの見方や考え方を培う人間教育としての教養教育から成っている。

基礎教育と教養教育のさらなる充実をめざして、平成23年度カリキュラム改正を行った。科目群の名称を変更し、科目群の編成を組み直し、そのことによって教養教育の目的が明確になるようにした（図1）。

まず、基礎教育科目の新たな編成では、大学での学びの基礎となる科目を『教養基礎』としてまとめた。従来と違うのは、「コンピュータリテラシー」が専門科目に配置されることになった点である。

大学における学びの基礎づくりは、プレゼンテーション力を養う「ビギナーズセミナーⅠ・Ⅱ」、論理的思考力・計算力を培う「基礎数学」・「基礎数学演習」、そして論理的な文章を書く力を磨く「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」で行う。日本語表現の時間は2単位増した。大学教育の基礎として文章を書く力が重要であると考えたためである（図2）。

『外国語』は同じグループにまとめ、そのなかで選択できるようにした。グローバル化する時代に必要な英語力をどうつけるかは大きな課題である。英語は必修の4単位に加えて、選択必修として最大6単位までとれるようにした（図3）。専門英語を磨くプログラムも用意した。

また、「第二外国語」の名称を「初修外国語」と変更して、序列意識を払拭した。中国語、ドイツ語、ロシア語のⅡは選択必修単位となったが、かわりに、Ⅲを選択して、より上のレベルの語学学習ができるようにした。さらに、留学生の日本語についても選

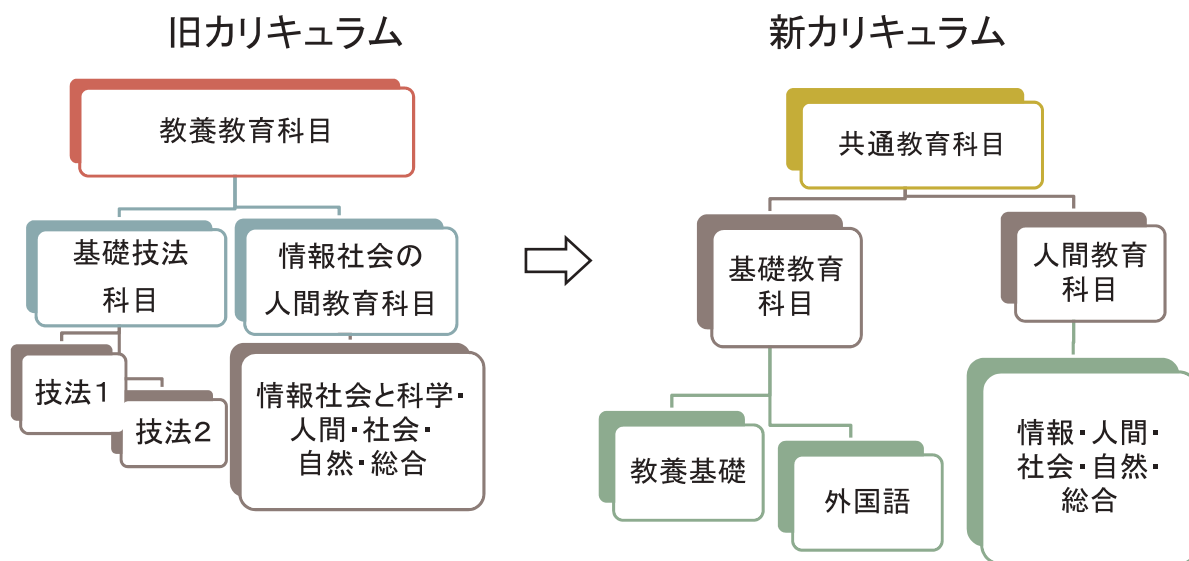


図1 カリキュラム表における枠組みの名称変更

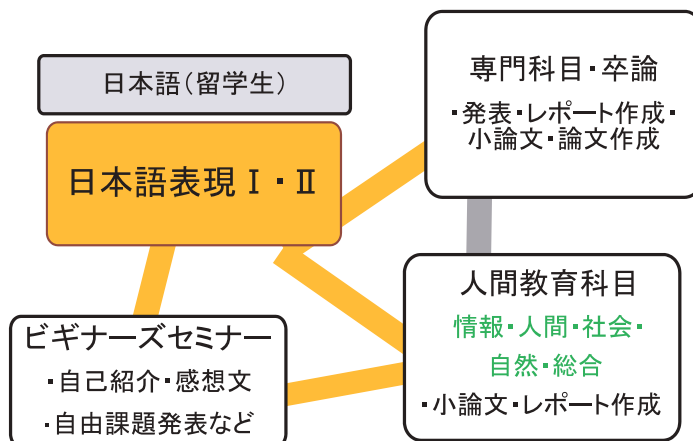


図2 日本語力を高めるための科目群

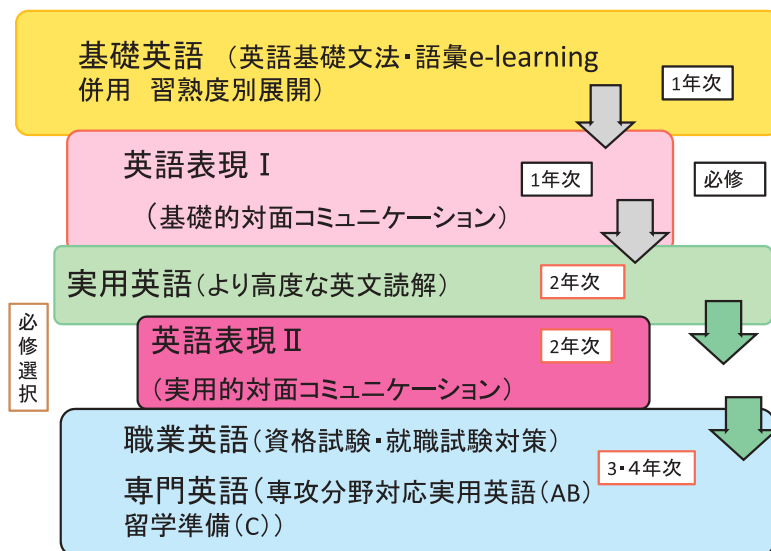


図3 英語力を高めるための科目群

択科目を設けて、他の語学が勉強できる道を開いた。

次に、人間教育科目においては、各学年の履修単位の上限が44単位となることに対応して、学年配置の見直しを行った。従来1、2年次開講科目に履修者が集中する傾向があったが、これにより幾分それが是正されるように思う。

『情報』分野は専門教育との関係が深いため、必修2科目を開講する。「情報の世界」で情報リテラシーを身に付けるとともに、新たに設けた「情報倫理」をさらに学び、ICTの専門家として恥ずかしくない「情報の使い手」となってほしいという願いを込めた(図4)。

『人間』『社会』『自然』では、学科と関連の深い推奨科目を指定し、専門教育とのつながりを明確にした。各分野から1科目以上履修するという点は変わらないが、『情報』で習得すべき単位数が増え

たため、これら3分野と『総合』から習得すべき単位数は18単位となる。幅広いものの見方を学ぶとともに、より深く考える力を身に付けてほしいので、講義のやり方も見直し、アクティブ・ラーニングなど座学にとどまらない形を取り入れたいと考えている。

『総合』では、『自然』から「健康とスポーツ」を移しⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳと複数科目にして修得しやすくした。キャリア教育の充実という点では、「キャリアデザインⅢ」を3年次の必修科目として新設し、キャリアサポートとの連携がとれるようにした。eラーニング科目として展開する。また、時代の要請に合うテーマを決めることの出来る科目として、「教養特別講義」を新設した。

学生が生き生きと学び、教員もその手応えを感じられる学舎になるよう、力を合わせていきたい。

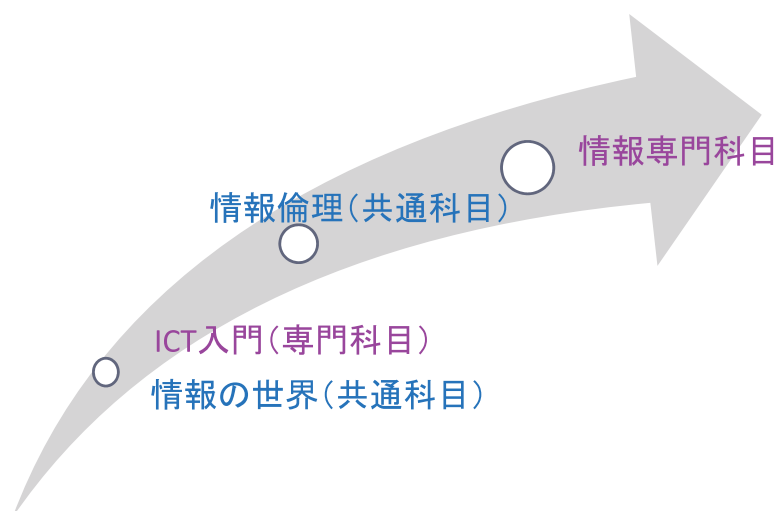


図4 全学共通・情報科学の基礎科目

## 先端経営学科の新しいカリキュラム（23年度）

先端経営学科長 中村 忠之

### 1) カリキュラム作成のプロセス

今回の先端経営学科のカリキュラム改正のプロセスは以下のステップで進めた。

- ① 学科の理念/教育目標の作成
- ② 育成する人材像の作成
- ③ コンピテンシーの明確化
- ④ コンピテンシーに基づいたカリキュラムの基本的な考え方の作成
- ⑤ カリキュラムの作成

### 2) 学科の理念

本学科の理念は以下のように定めた。

『情報技術（IT）の進展・普及のもと、企業の成長・発展には、業務・組織の仕組みの改革が不可欠です。この改革に必要な計画・分析・管理・運営に関する学問的に深い洞察力、グローバルな視点、IT活用の実践的な知識とスキルを身に付け、改革を推進する人材を育成します。』

### 3) 育成する人材像とコンピテンシー

育成する人材像とコンピテンシーは以下のように定めた。

#### 育成する人材

- ・情報通信社会の中で経営ニーズを的確にとらえ、ITを活用して企業改革、事業最適化のための企画・立案およびその推進ができる人材
- ・日常生活においてもITを活用し、最新の経済・社会的環境の変化に対応できる人材

#### コンピテンシー

- ・日常の経済生活や企業の経営活動について基礎

的な理論を用いて説明できる

- ・経営を取り巻く外部環境を正確にとらえ、その動向や事例を収集・整理し、自主的な意思決定に活用できる
- ・組織体の活動に必要な情報システムの計画・設計・運用・改善の基礎技能を身につけることができる

### 4) カリキュラムの基本的な考え方

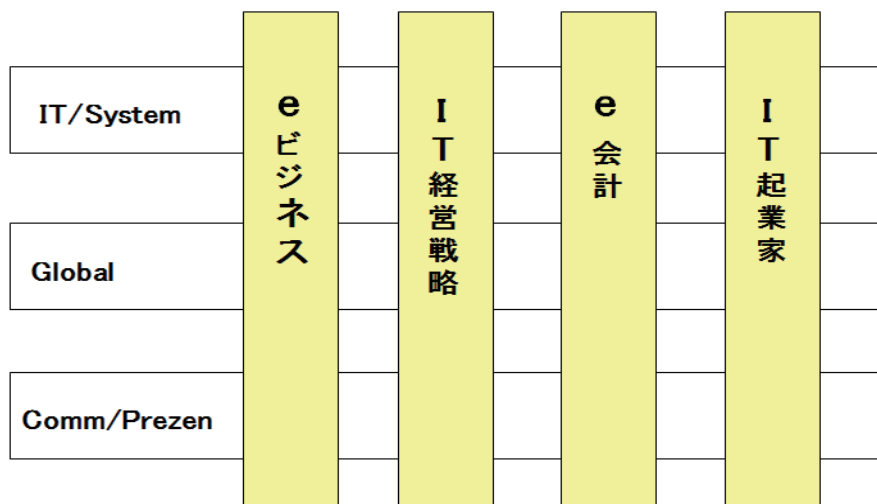
カリキュラムの基本的な考え方は下図にあるように4つの履修コースを基軸とし、コース横断的なIT/システム関連科目、国際的な視野を広げる科目、コミュニケーション/プレゼンテーション能力をつける科目との相乗効果を図るものとした。

### 5) カリキュラム改正の大きな狙い

先端経営学科は従来からのIT系科目と経営系科目をただ単に集めてきたというカリキュラムの傾向が強くて科目数も多く、最近の情報社会の進展に適応したカリキュラム内容になっていなかった。そこで上述の流れに従い、今回の改正の狙いの基本方針を以下のように設定した。

- ① コンピテンシーに合った科目の整理・統合
- ② 時代の要求に合った科目名・科目内容の検討
- ③ 内容の重複している科目の見直し
- ④ 通年で4単位になっている科目を半期2単位にするなどして、広い分野の科目を採用
- ⑤ カリキュラムアドバイザーボードの意見の反映

以上の改正の狙いは平成23年度カリキュラムでおおむね達成されたが、今後とも時代の要請を先取りするカリキュラムの改正は必要不可欠であると考え



## システム情報学科の新しいカリキュラム（23年度）

学科長 森澤 好臣

全学的なカリキュラムの見直しに合わせて、平成22年5月より若手の教員を中心としたシステム情報学科のカリキュラム見直し委員会を組織化し、見直し作業を実施した。

見直しの基本方針は次の通りであった。

- ・学科の理念と教育目標を明確にする。
- ・システム情報学科のコンピテンシーを明確にする。
- ・他学科の専門コースとの重複を回避し、新たに大学院への連続性を試行する。
- ・ロボット・組込み関連科目を強化する。
- ・発想法・問題解決技法とプロジェクト学習を導入する。
- ・専門基礎科目のグループ教員制を試行する。

### （1）学科の理念と教育目標

#### 【学科の理念】

人間活動を含めたすべての分野でITはコア・テクノロジーとして重要になりつつあります。当学科はコンピュータサイエンスやソフトウェアエンジニアリングなどの深い知識を修得し、多種多様なこれらの応用分野でその中心を担い得る高度な情報システムエンジニアを育成します。

#### 【教育目標】

- ① 多くの産業の中心となる情報システムの開発に必要な知識や技能を修得した人材の育成
- ② 組込み型ソフトウェアや実社会で標準的に使用されている技術を含む、様々なソフトウェアの開発に従事できる人材の育成
- ③ 経営学の知識とともに、ネットワーク、画像処理、人工知能などの様々な情報技術を応用し、問題解決を図り、地域や社会に貢献できる人材の育成
- ④ 情報関連各種資格の取得

（2）システム情報学科のコンピテンシーは、教育目標を適切かつ簡潔に表現したものに集約した。

- C1：コンピュータサイエンス、ソフトウェア工学、ネットワーク、データベースに関する基礎知識を体系的に説明できる。
- C2：ハードウェア、計測・制御に関する基礎知識を体系的に説明できる。

- C3：ソフトウェア開発技術を使ったソフトウェア開発の一端を担うことができる。
- C4：ソフトウェア開発技術を使った組込みシステム開発の一端を担うことができる。
- C5：経営分野の知識やICT（情報通信技術）を使って、様々な課題に対する問題解決案を提案できる。
- C6：与えられた課題に対し、問題点を見極め、解決に必要な知識や技術を修得し、課題の対処策や解決策を実行できる。
- C7：自分で課題を発見し、それについて調査・考察したこと、対処策や解決策について説明し、議論することができる。
- C8：与えられた課題について、調査、考察し、論理的にかつ分かりやすく説明し、また、文書化することができる。
- C9：自己表現と協調性をバランスよく発揮できる。

### （3）専門コースの見直し

他学科との重複が課題であった専門コースの重複を回避し、時代の要請に合わせて次の三つの専門コースと大学院までの一貫コースの四コースに変更した。

- ・システムデザインコース
- ・情報科学コース
- ・ロボット・組込みシステムコース
- ・ITアーキテクトコース（6ヶ年コース）

### （4）ロボット・組込み関連科目の強化

新任専門教員の採用を前提に、ロボット・組込み系の専門分野を充実した。

### （5）発想法・問題解決技法とプロジェクト学習の導入

中だるみが問題視されている2年次前期にプロジェクト学習型の科目を新設した。発想法と問題解決技法をPBL（Project Based Learning）形態で学習させ、2年次後期の情報専門演習に繋げる。

### （6）グループ教員制の試行

複数のクラス展開をしている専門基礎科目を複数の教員が担当できるようにグループ教員制を試行する。平成23年度は専門教員より科目の希望を徴集し、希望に添う形で教員を配置する。平成23年度と平成24年度は試行し、平成25年度以降にグループ教員制を本格化させる予定である。

## 医療情報学科の新しいカリキュラム（23年度）

医療情報学科長 和田 龍彦

医療情報学科は2010年3月に一期生を社会に送り出し、学科創設来の初期目的を果たしたが、いくつかの修正しなければならない問題が生じていることも明らかとなった。そのため、毎年の精査を欠かさず行ってきたカリキュラムについても、一期生の卒業と同時に、2011年度用カリキュラムとして、「医学・医療科目」、「医療情報システム科目」、「演習科目」に対する総合的見直しを始めた。また、「情報科目」については他学科の変革と共に全学的改変を行い、情報大学としての名に沿ったカリキュラム構成を検討してきた。その結果、当該学科の教育目標である。①幅広い教養と専門性の高い医学・医療情報の知識ならびに実践性の高い情報処理技術を身につける。②医療情報分野における専門職業人として、医療情報を対象とした情報コミュニケーション技術（ICT）の活用・応用技術などを身につける。③主体的な行動力・判断力・学習能力・思考能力を養い、医療情報関連の各種資格を取得する。などが遂行できる実践型カリキュラム構成を構築することができた。

医療情報学科では併設の医療情報センターやバイオ解析室、さらには現場実習などを取り入れて、幅広い医療情報や医療システムに関する知識を持ち、医療情報分野のICT化や関連する高度医療領域のリードを可能とするための人材育成を目指してきた。これに伴い2008年度より特色ある資格別コースを設定してきたが、2010年度には新たな4つの履修コースに再編し、それぞれの特徴が明瞭化されたコースを提示してきた。2011年度は若干の修正を加えるに止め、ほぼ前年度に沿った以下のようなコースを設定した。

- 診療情報マネジメントコース；このコースでは、疾病分類や医療の質の向上に必要な病院のICT化を推進し、医療・教育機関や海外医療派遣施設で活躍できる人材の育成を目標としている。用意された開講科目からは医療・医学の専門的知識を習得し、診療情報管理や高度医療事務管理の知識と技術を学ぶ。
- 医療情報システムコース；このコースでは、電子カルテなど病院特有の情報システム運用を担当し、情報技術を駆使できる人材の育成を目標としている。学習内容としては病気の診断、治療、病院情報、病院管理、病院経営など、医療情報システムに関わる幅広い知識と技能を学ぶ。

- 医療情報テクノロジーコース；このコースでは、情報処理や画像処理などの処理技術を駆使した新しい医療情報システムの開発や、環境および安全性を考慮した医療機器安全管理ができる人材の育成を目標としている。情報処理技術、医療情報管理技術、生体計測技術、安全設計などの知識と技術を学ぶためのカリキュラムを用意している。
- バイオサイエンスコース；このコースでは、医療・医薬の分野において、バイオテクノロジー技術を用いた健康とエコロジーの研究・開発ができる人材の育成を目標としている。コースに用意された講義や実習を通して生命に関わる幅広い解析方法・応用力を習得し、ICTと融合するバイオインフォマティクスの技術を身につける。

以上の4つのコースでは、専門医療職に欠かすことのできない各種資格について複数の受験が可能であり、さらに意欲のある学生には他コースが対象としている資格をも受験可能とするために、選択したコース以外の開講科目も受講できるようカリキュラムに工夫を凝らした。また例年通り、各コースを通じた2011年度用の新たなコンピテンシーを作成し、それぞれの開講科目を対象としたマッピングをおこない、その内容については受講生にも周知徹底するようシラバスに併記することにした。これにより、各コースの特徴と学ぶべき方向付けが明らかとなり、自らの希望する進路が的確に選択できるようになった。

今後は新たな学科構成をも視野に入れ、医療情報分野への強い興味と探求心、および新しい領域に挑戦する意欲を持ち、医療技術の応用ならびに医療を取り巻く環境や安全に関心のある者を社会に輩出できるよう、今後ともカリキュラムに関わる検討を続けたい。なお、医療情報学科が用意している特定コースごとの対象資格を下表に示すが、他コースからも受験が可能となるように、全ての開講科目が自由に選択できる構成となっている。

<b>診療情報マネジメントコース</b> 診療情報管理士、診療報酬請求事務 メディカルクラーク、医療秘書他
<b>医療情報システムコース</b> 医療情報技師検定 医療事務作業補助技能認定他
<b>医療情報テクノロジーコース</b> 第2種ME技術実力検定、基本情報技術者試験他
<b>バイオサイエンスコース</b> 中級バイオ技術者認定 2級バイオインフォマティクス技術者認定他



## 情報メディア学科メディアデザイン専攻の 新しいカリキュラム（23年度）

情報メディア学科長 藤井 敏史

### 1. カリキュラム改正の狙い

今日、日本のコンテンツ産業は世界的に評価を受け、特に若い世代の人々に様々な影響を与えています。また、ブロードバンドネットワークが世界的に網羅され、新しい形でのコンテンツ形態と供給システムが凄まじいスピードで生まれてきています。

メディアデザイン専攻は、映像、アニメ、3DCG、グラフィック、ウェブ、感性などの最先端の分野で活躍している専門家教員を中心に、情報技術（IT）を核にした新しい時代のコンテンツを創造し得る人材を育成することを目標としています。その目標の実現に向けてカリキュラムを改正しました。

### 2. 育成する人材像

メディアデザイン専攻が育成する人材像をより具体的に記すと次のとおりです。

- (1) 情報技術（IT）を積極的に活用し、デジタルコンテンツを制作できる人材
- (2) ひとつの専門技術を持ち、多くの周辺技術を理解できる人材
- (3) 発想力・企画力・計画力・実行力・評価力を備える人材
- (4) 高度なコミュニケーション能力を備え、チームワークを得意とする人材
- (5) ビジネス創造・提案ができるプロデュース力を備える人材
- (6) 社会、文化、倫理的な側面を理解し、行動できる人材

### 3. コンピテンシーとカリキュラムの関係およびカリキュラムの特徴

上記の人材について検討した結果、表1に示す大分類に再編成し、それをさらに細分化して計24個のコンピテンシーを設定しました。カリキュラムを構成する各科目にそれらを割り振っています。

メディアテクノロジー専攻のカリキュラムの特徴は次のとおりです。

- (a) 授業科目には、教養科目と専門科目があります。

- (b) 教養科目は、メディアデザイン専攻に共通です。

- (c) 将来就きたい職業あるいは学びたい専門領域に対応した履修モデルとして、下記の4コースが設定されています。また、メディアデザイン専攻の科目も一部選択することができます。

- (d) 4年間を通して、少人数のゼミナール形式科目や講義を配置し、コミュニケーション力を伸ばすこと、個性と能力に応じたスキルアップと研究活動に取り組むことを目指しています。

表1 メディアテクノロジー専攻のコンピテンシーの大分類

<b>A</b>	上位のコンピテンシーを達成することのできる人材の育成
<b>B</b>	システムエンジニア、プログラマーとしてのコンピテンシー
<b>C</b>	各種メディア処理に関わる技術者としてのコンピテンシー
<b>D</b>	Web、ネットワーク系技術者としてのコンピテンシー
<b>E</b>	実践的な技術者としてのコンピテンシー

#### ●映像・アニメーションコース

ショートフィルムなどの実写映像制作技術や、アニメーションの原理・技術を学び、新時代の映像クリエイターを養成します。

#### ●3DCGコース

3DCGの静止画・動画制作の基礎と応用を学ぶとともに、モーションキャプチャなどを用いた高度な作品作りを学びます。

#### ●ウェブデザインコース

新しい技術を取り入れたウェブサイトの制作方法を学び、斬新なデザインで人を惹きつけることのできるウェブデザイナーを養成します。

#### ●グラフィックデザインコース

使いやすさ、見やすさを考慮した上で、ポスターなどの広告のデザイン、コンピュータを使った本のデザインなどを学びます。

情報メディア学科メディアテクノロジー専攻の  
新しいカリキュラム（23年度）

情報メディア学科長 藤井 敏史

1. カリキュラム改正の狙い

世界規模のインターネットをはじめとして、単なる通話機能を越えた種々の機能を持つ携帯電話など、我々はいまやユビキタス時代に突入しつつあります。

メディアテクノロジー専攻は、これらの中核となる関連新技術を修得・使いこなす、かつ、これらを元にまったく新しい技術や、ビジネスを生み出すことができ得る高度IT人材を育成することを目標としています。その目標の実現に向けてカリキュラムを改正しました。

2. 育成する人材像

メディアテクノロジー専攻が育成する人材像をより具体的に記すと次のとおりです。

- (1) 映像、動画像、音声などのデジタルコンテンツを処理できる人材
- (2) ユビキタスコンピューティングやゲームプログラミングの開発に従事できる人材
- (3) ウェブアプリケーションを開発できる人材
- (4) ネットワークの構築、運営、管理、セキュリティに代表されるインターネット基盤技術を修得した人材

3. コンピテンシーとカリキュラムの関係およびカリキュラムの特徴

上記の人材について検討した結果、表1に示す大分類に再編成し、それをさらに細分化して計20個のコンピテンシーを設定しました。カリキュラムを構成する各科目にそれらを割り振っています。

メディアデザイン専攻のカリキュラムの特徴は次のとおりです。

- (a) 授業科目には、教養科目と専門科目があります。
- (b) 教養科目は、メディアテクノロジー専攻に共通です。
- (c) 将来就きたい職業あるいは学びたい専門領域に対応した履修モデルとして、下記の4コースが設定されています。また、メディアテクノロジー専攻の科目も一部選択することができます。

- (d) 4年間を通して、少人数のゼミナール形式科目や講義を配置し、コミュニケーション力を伸ばすこと、個性と能力に応じたスキルアップと研究活動に取り組むことを目指しています。

表1 メディアテクノロジー専攻のコンピテンシーの大分類

<b>A</b>	創造力・企画力・計画力・実行力を備えたITクリエイティブ人材
<b>B</b>	問題解決のためのデザイン提案力を持ったITクリエイティブ人材
<b>C</b>	高度なコミュニケーション能力を備えたITクリエイティブ人材
<b>D</b>	専門技術をもち、実践的に活用できるITクリエイティブ人材
<b>E</b>	情報技術（IT）をコンテンツ制作に活用できるクリエイティブ人材
<b>F</b>	社会、文化、倫理的な側面を理解し、行動できるITクリエイティブ人材
<b>G</b>	チームワークを得意とするITクリエイティブ人材

● デジタルサウンドコース

DTM関連処理技術を中心に学び、デジタルサウンドに精通した技術者を養成します。

● ゲームプログラミングコース

ゲームプログラムの基礎から応用を学び、制御技術と新しい感性を持ったゲームプログラマーを養成します。

● ウェブアプリケーション開発コース

インターネットやLAN上で動作するアプリケーションシステムを構築するために必要な技術に加えて、携帯電話などモバイル技術にも精通したシステムエンジニアを養成します。

● インターネット・セキュリティコース

ネットワークの設計、管理、運用およびネットワークプログラミングと共に、現在もっとも必要とされているセキュリティ技術を学びネットワーク技術者のスペシャリストを養成します。

GPAの“本格的”始動

今年度は、昨年試行してきたGPA制がある意味で本格的に始動した年でもある。というのは、GPAを実行するに値する最低限の関係制度が整備されたからである。具体的には、履修登録抹消制度の制定、合格ラインを60点以上とし、0～4までのGPAの割振りの改定、更に教務委員会主導で行われたCAP制の導入によって、GPA制を実行するに最低限の制度整備がなされた。これらによって、出てきたデータもより信頼性のあるものになり、解析の信頼度も増してきた。まずWG3主導で行った上記二つの制度変更の影響を見ていく。

合格ラインの改定の影響

基礎数学という全学1年生必修の共通科目を見ていく。この科目は毎年ほぼ同じ試験を行い、合格ラインを機械的に60点にあげた科目である。いうまでもなく不合格学生が大きく増えた。しかしながら、全科目のGPAの平均値を見てみると、表1のように大雑把にはほぼ同じ、詳細では、情報メディア学部の上昇が影響し、若干上昇していることが分かる。これらから、各教員は合格ラインの上昇を適度に吸収し、前年並の成績を付けていることが判明した。

表1. 科目のGPAの平均

学部	2009 年前期	2010 年前期
経営情報	2.01	2.08
情報メディア	1.75	2.05
全学	1.92	2.06

しかし、2009年度と2010年度の共通科目だけに着目してGPA値の値を比較すると図1のように、2010年度の方がやや低くなっていることが分かる。ただし、図1の相関係数平方は、約0.6とあまり大きくないのでそれほど信頼性のあるものではない。これらのことから、2010年度カリキュラムが、特に情報メディア学部を中心によく改善された（経営情報学部は2009年度と2010年度カリキュラムはほぼ同じである）と推察される。

履修登録抹消制の効果

登録末梢制を活用した学生のデータは表2に掲げられている。この表から2年生、3年生を中心に一定の活用がなされたといえる。1年正は、必修科目が多いので抹消を試みるケースは少ないとみられ、この制度を活用した学生が少ないことは自然である。又、4年生は、卒用要件に総単位数が決定的役割を

果たすため、保険を、かけてるという意味でなかなか抹消に踏み切れない、ないしは卒業目前ということで抹消しないことによるGPAの低下をそれほど

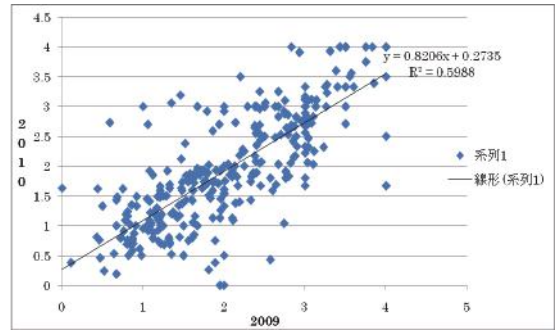


図1. 2009年度と2010年度の科目GPAの相関

気にしていない、ということが登録末梢制をあまり活用しない理由と考えられる。しかし、4年生の活用人数は少ないながらも、活用した学生は、やや多くの科目を抹消しており、その制度を有効に活用している学生もいるということが分かる。

表2. 履修登録抹消制度の活用状況

	総数	申請者	最大申請科目数	最大申請科目数
1年	13件	13人	1科目	1.0科目
2年	126件	80人	6科目	1.58科目
3年	96件	57人	7科目	1.68科目
4年	48件	22人	5科目	2.18科目
全体	283件	172人	7科目	1.65科目

ただ、後でも指摘するように、まだまだ活用状況は活発は言えず、学生には、この制度のさらなる周知が必要であると考えられる。

学生アンケート

GPAの導入によって学生の学習態度や履修行動にどのような変化を齎したのかを課調査すべく、アンケート調査を行った。これは、国公私立4大学IRネットワーク（同志社、北大、大阪府立、甲南各大学）に相乗りした学生満足度調査の一環として、本学両学部の3、4年生100人に対して行った。その結果、表3にあるように、GPAが殆どの学生に周知しているわけではないことが判明した。この傾向は、情報メディア学部において顕著である。又、GPAの値を意識して履修登録の改善を熟慮した学生が少ないという問題も判明した。更にGPAの周知が徹底しないことを反映させてか、その活用についても消極的な意見が多かった。

これらのデータから、新学期のガイダンス等において、GPA制及び、履修登録抹消制度の周知徹底を図るとともに、教育アドバイザーなどを通し、GPAを意識した履修計画を立てるよう促すことが必

要であろう。

表3. アンケート調査の結果

1. あなたはGPAについて知っていますか	
① 知っている	47.8%
② 聞いたことはあるが詳しくは知らない	34.4%
③ まったく知らない	17.8%
2. あなたは、自分のGPAの値を把握していますか	
① 知っている	20.0%
② およその値は知っている	44.4%
③ 知らない	35.6%
3. あなたはGPAを高くしようと努めていますか	
① 強く努めている	10.0%
② ある程度は努めている	50.0%
③ 努めていない	40.0%
4. あなたはGPAを上げること、優の数を増やすことのどちらを強く意識しますか	
① どちらかという、GPAを上げるほうを意識している	12.4%
② どちらかという優を増やすほうを意識している	59.6%
③ 両方とも意識していない	28.1%
5. あなたはGPAの導入後、以前よりよく考えて履修登録するようになりましたか	
① 以前よりよく考えて履修登録するようになった	25.6%
② 以前と余り変わらない	74.4%
6. あなたはGPAにもとづいて奨学生、進学、成績優秀者の選定などの活用に賛成ですか	
① 賛成である	23.3%
② よく分からない	57.8%
③ 反対である	18.9%

#### クラスごと科目のGPAとその問題点

クラスごとの科目のGPの平均値を評価した結果、大きなばらつきがみられた。このことは、大学において、成績評価は担当教員の裁量に任せられていて、絶対評価でなされるので、ある意味では自然な現象である。しかし、問題になるのは、同一内容の同一科目の成績において、担当教員が異なる場合に著しい差異が生じていることである。実際2010年度前期において、科目GPAにおいて担当者によって1以上の開きがある科目があった。このような問題は、近年どの大学でも生じている問題であるというが、GPAのより広い活用を意図した場合、公平性の観点から、放置できない問題であると考えられる。

一方、前述のように大学では、成績評価は担当教員の責任に任せられている。そこでWG3としては、このデータを教員に公開し（学生には公開しない）、更に各部署の学科長に、これらについて適当な折に議論してほしいと申し入れをした。そのことによって自発的是正がなされ、学生にも納得してもらえる公平な成績評価につながればと考えている。

又、学生にとっても自分の学習成果を十分アピールできるよう登録抹消制度を的確に活用してほしい

と考えている。そのことと、学生の学習意欲を亢進させるため、学生のGPAと席次の対応表を公開した。これを見ることによって、学生が、自分はどの位置にいるのかが分かり、下位の学生には奮起を促し、上位の学生には競あわせ、お互いのスキルアップに繋がればと期待している。

#### GPAデータの活用

GPAデータ解析の基礎は分布関数である。図2上と図2下はそれぞれ先端経営学科（以後K学科）及びシステム情報学科（以後J学科）1～4年生のGPAの累積分布である。データの信頼性に欠ける4年生を除き、おおむね1年生が良く、2年生が悪く、3年生で1年生近くまで修復される。実は他学科・専攻においても似た特徴が見られる。2年生が悪いのは、3年への進級条件を満たせず、成績の悪い学生が蓄積されたためである。K学科3年生でGPAが0.5以下の学生がいないことは、この学科において進級条件の淘汰が有効であることを示している。又、J学科の2年生の成績が悪いのは、GPA～0近辺の学生が10%以上もいることに起因している。このことは、昨年2年生のGPA値が悪かったことから予測可能であった。こういったデータはカリキュラムや進級上意見の適正さに対し参考資料になりえる。

図3の学科・専攻ごとの累積GPA分布をみてみよう。図3からおおむねJ学科が悪いことがわかる。しかしJ学科では入学直後の基礎数学の習熟度調査ではおおむね一番良い成績を残している。又メディアデザイン専攻（D専攻）は、特に2年生を中心に比較的高いGPAを示している。3年次に比較的高いGPAの高い学生が少ないことは、他のデータからも推察されている。これらのことは、各学科のカリキュラムの特徴から来るものと考えられる。

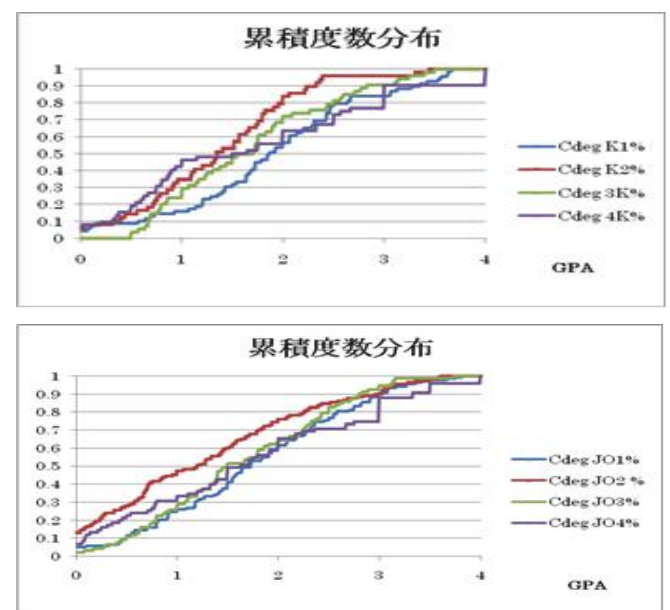


図2. GPA累積分布（上；K学科、下；J学科）

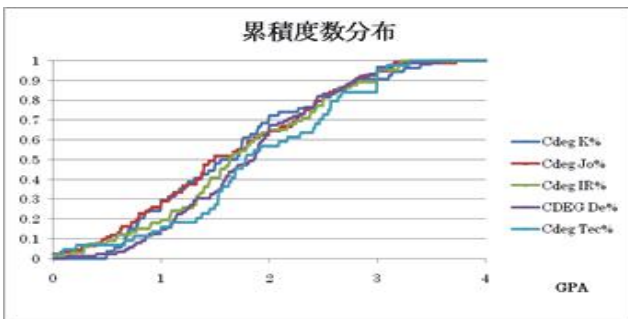
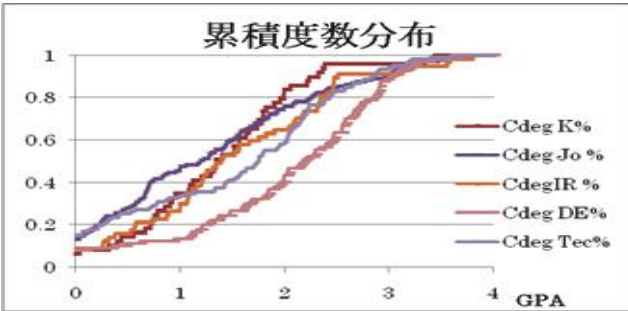
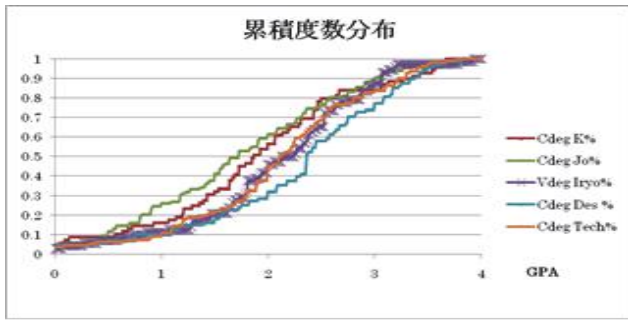


図3. 学科・専攻ごと累積GPA分布（上から1、2、3年生）

もっとも興味深いのは、図4にあるGPAと取得単位率の相関図である。これはJ学科2年生のデータであるが、面白いことに、各学年、各学科・専攻においてかなり普遍性のある図となっている。この図からGPAの悪い学生の主な原因は、不可の個数であることがわかり、履修登録抹消性の更なる活用が必要であることを強く示唆している。又、この図の普遍性から、インターンシップ等に推薦可能な、ある程度学力が保障できる学生は、GPAが2ないしそれより少し上であろうことが推察される。又、1年生においては、厳しいCAP制により、単位取得率はほぼ取得単位数に等しい。現在2年次における成績不良学生の洗い出しには総取得単位数が基準に

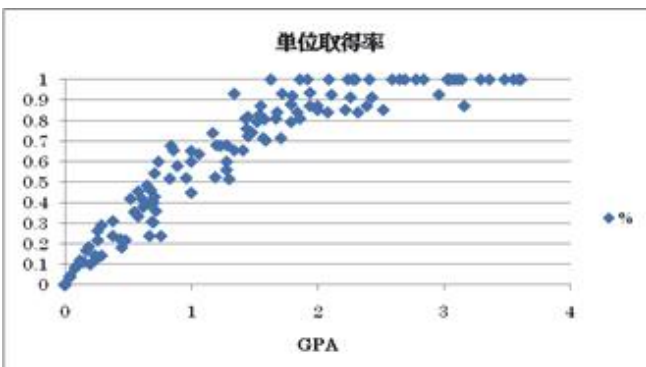


図4. GPA v.s 単位取得率（J学科2年生）

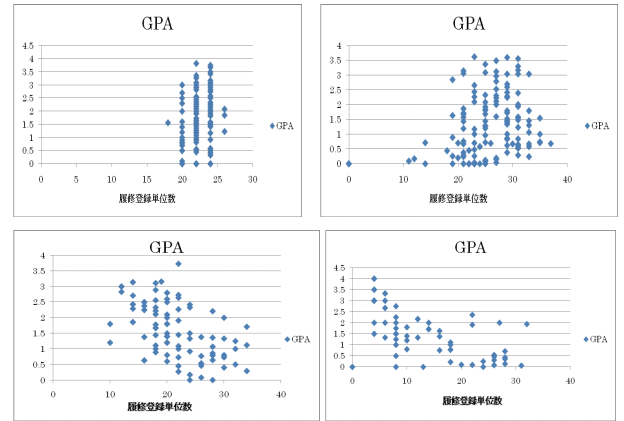


図5. 登録単位数 v.s 取得単位数（J学科1～4年生）

なっている。さらにGPAの基準を付加することは、そういった学生の数を増加させ、指導の負担が懸念されている。しかし、GPAが2以下の学生に関しGPAと取得単位率がほぼ比例していることから、GPAによる成績不良学生の洗い出しに、極端な変動をもたらさないこと、それゆえGPAによる洗い出しが現実的であることを示している。又、GPA > 3の単位取得率ほぼ100%の学生に対しては、GPAに依存したCAP制の導入が可能であることを示唆している。このように、この図から非常に多くの情報が読み取れる。

図5はJ学科1～4年生の登録単位数と取得単位数の相関図である。この図もD専攻（D専攻は、2年生は極端にGPAが高く、3年生で他学科に逆転されるという特殊事情があった）以外、学科依存性が少なく、ほぼ普遍的なデータである。1年生は必須科目で縛られているので有効なデータが出にくく、2年生はこの図にほとんど相関がみられない。図5下段の3、4年生においてやや逆の相関がみられる。つまり登録単位数が多いほど、取得単位率が下がる傾向にある。これは、1、2年時の取りこぼし科目を履修しようとするが無理がたたり消化不良になったためであると考えられる。このデータから、2年次のみを進級条件の設定、CAP制に有望な参考資料になりうる。

これら、GPA（と取得単位率）のデータは、CAP制、進級条件、インターンシップ選定基準、成績不良学生の洗い出し、学生のレベルにあったカリキュラム構成などに対し、有効な情報が提供できると考えられる。しかもそれらに関する、今後の学内制度の整備に対し、統計学的、客観性のある資料を与える。GPAは単なる成績評価の一つの指標止まらない、大きな可能性を示す貴重なデータなのである。

## 教育アドバイザー制度の試行について

WG9リーダー 長井 敏行

教育アドバイザーの仕組みを考え始めて3年、そのうちの1年は試行期間として使われた。しかし、教育アドバイザーの理念・目的が十分に整理されておらず、したがって十分に浸透していないというのが本当のところであろう。

その理由のひとつは、教員に対して教育アドバイザー制度の基本理念をガイダンスし、ひとつの方向へ収斂するための時間がもう少し必要であったということであろう。なによりも、このような教育アドバイザーのモデルを大学において実際のところ経験したことがない教員がほとんどで、そこまでという躊躇もあったであろう。なかには、研究活動の縮減に繋がることへのいら立ちもあったであろう。議論を十分に尽くせないまま、課題を抱えた船出であった。

今日の大学を取り巻く社会環境は、かつての大学の社会環境とは、まったく違ってきていることも事実である。大学生になるまでの環境がかつてとは違うことも理解しなければならない。昨今の社会環境の変化は、急速に社会の隅々まで行き渡り、大学の環境変化も著しいものがある。大学の変革も当然である。

大学の変革を促進する要因のひとつとして、昭和30年16万人から平成16年度60万人へと大学教育を受ける学生が量的に拡大した反面、大学の質の問題が今日の課題である。この問題は、大学が個性・特色を明確にして機能的に分化しながら質の面で多様化の方向へ進むものと考えられている。大学は、おのずから進むべき道の下に質を保証することが求められ、厳しさを増すものと思われる。

### 1. 教育アドバイザーの必要性

質の保証をするためには、大学の個性・特色にかかわらず、根本的に学生の学習の取り組み方と学生の生活面のアドバイスを含めた支援が有効である。

学生は、この授業が社会人になったときに、どんな意味を持つことになるのかわからないのが普通である。そのため、授業の価値がわからないまま、漫然と授業を受講し、したがって、授業に真剣に向かい合わず、結果的に授業が身に入らないことになる。こうしたことを解決するためには、問題意識を顕在化させ、将来の進路、授業選択及び日常生活の送り方をアドバイスすることが必要である。スタートアッププログラムの履修理念を思い起こしていただきたい。

### 2. 教育アドバイザーの目的

現行のクラス担任制度を補完するという目的で出発した。これがスタートである。しかしながら、残念なことに、担任制度の理念・目的を明確にせず補完が目的であるといった曖昧な形でスタートしたことが教育アドバイザー制度に少々混乱を与えたと思われる。

学生は、様々な問題に直面するが、そのひとつに登校の問題、出欠の問題があげられた。しかし、出欠は、当該科目の担当教員が十分把握しているものである。教育アドバイザーの出る場面は、少ないと思われる。出欠過多の学生には、連絡しても連絡が取れないという状況がある。このような学生は、抜き出して一定の部署で取り扱った方が合理的であるという意見が多数であった。

教育アドバイザー制度は、必要に応じてアドバイスをしたり、アドバイスを受けたりするという、柔軟な任意の制度として運営していくことも考えられよう。

いずれにせよ、担任制度の見直しをも含めて、教育アドバイザーの理念・目的を再構築すべきである。

### 3. 教育アドバイザー制度の目的の再構築に向けて

教育アドバイザー制度の目的を再構築する場合の、基本戦略を策定する必要がある。それを概略箇条書きにしてみたい。

- ① 学生の将来にとってどのような知識が必要かという問題意識を顕在化させること。  
将来の進路が漠然であっても、学生はそれを想定する必要がある。
- ② 将来の具体的進路、授業選択及び日常生活の送り方をアドバイスすること。  
専攻・科目の選択等アカデミック・カウンセリング、生活の時間管理等その他の一般的な項目についての相談に応じることなどが考えられる。
- ③ 教育アドバイザーの指導については、教員・学生が必要に応じて相談する任意制の柔軟な義務として機能させること。
- ④ しかし、前期・後期1回の面談は実施すること。

### 4. 最後に

これらの役割が担任に求められているというのであれば、教育アドバイザーの存在意義を確認し、必要がなければこの制度は、23年度限りということになるであろう。クラス担任は、学生の受け持つ学生が多すぎて有効に指導することが困難であるということもあろう。いずれにしても、担任と教育アドバイザーの役割を明確化し、それぞれの理念と目的に基づいて実効可能にしなければならない。

次に、WG9の中期目標等を掲げる。

#### 中期目標（案）

- 1 学生が頼りにするような教育アドバイザー制度を確立し、学生の相談相手として十分に機能することを目指す。

#### 中期計画（案）

- 1-1 教育アドバイザーの基本的役割を整理し具体的な制度として整備する。

#### 23年度計画（案）

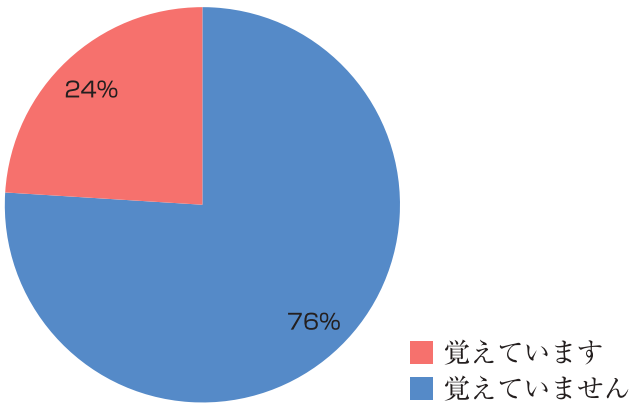
- 1-1-1 22年度の試行の結果を受け、教育アドバイザーの基本的役割はどこにあるかを探りながら、引き続き問題点を徹底的に洗い出し、解決方法について検討する。
- 1-1-2 学生との信頼関係を構築するため、教育アドバイザーの役割はどうあるべきかを具体的にまとめる。

最後になったが、学生が教育アドバイザー制度を通じて自ら問題意識を研ぎ澄まし、「発見」と「達成感」を感じてくれば、成果があったと言えよう。1年後が楽しみである。

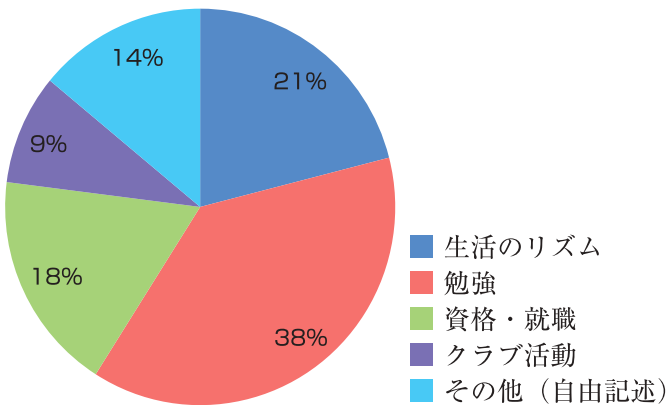
次に、平成23年1月に行った学生アンケートの結果を示す。

アンケート集計  
 対象 1年生  
 回収 322名 (469名)  
 回収率 68.7%

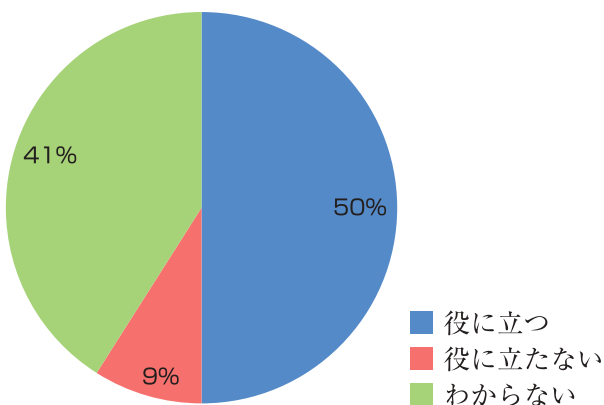
アドバイザーの名前を覚えていますか



アドバイザーとどんな話をしましたか



アドバイザーは、役に立ちましたか



1. 役に立った 118名 (37%)

主な理由:

1. これから勉強する上で役にたった。
2. 学生生活を送る上での的確なアドバイスを得られた。
3. 大学生のうちになんかことをしておけばいいのかということ。
4. 大学になれていないときに何かを聞くことができるのは良い。
5. 先生に導かれて、将来の進む方向が分かりました。
6. 近年の就職の大変

さについて詳しく教えてもらえた。7. 相談に行かなくても、先生が私の名前を覚えてくれていて、「最近どうだい?」と聞いてくれたりして、嬉しかった。

2. 役に立たない 38名 (12%)

主な理由:

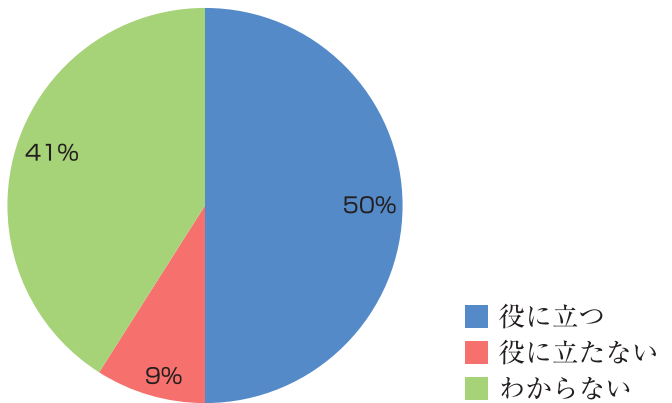
1. 相談したい事が無かった。
2. 持論ばかりぶつけてくるのでめんどくさい。
3. 何が不満ということはないが、別にいなくても問題ないと思う。
4. なにかとつっこまれすぎておもしろくなかった。

3. わからない 166名 (51%)

主な理由:

1. 話し合いを設けてもらうのはうれしいが、日時をはっきり手紙などで伝えてほしい。メールだとどうしても見ない日が続くので。
2. あまりアドバイザーの先生と接する機会が無かったため良くわからない。

アドバイザー制度は今後役に立つと思いますか



4. その他、自由にご意見を述べてください。

主な意見:

1. 今後もこの制度の力を借りたいと思った。
2. 教育アドバイザーは、先生によっては頼れる人がいると思う。しかしながら、頼れない先生がいるので、意味がない人もいます。
3. 他の先生がどんなことをしているか、少し興味がある。
4. 先生によってやる気の程度の差がありすぎる。
5. アドバイザーによって、呼び出しがバラバラだったりまったく話しのないアドバイザーがいるので積極的に行動してほしいと思いますし全体で方針を固めて欲しかったりします。
6. 友人が、昼休みに呼び出されていて大変そうでした。
7. もっと話す機会を増やせばいいと思います。
8. 現状では役に立たない。
9. 来年度以降もやってほしい。
9. 高校から大学は一気に生活面も授業も違うので、相談できる先生が決まっています、非常に安心した!
10. もうちょっとアドバイザーの先生との交流があれば良いかなと思いました。
11. 学生から積極的にいける形にできればよりよいものになると思った。
12. アドバイスされてないと思います。
13. 教育アドバイザー制度を、どのように活用するのかわからなかったです。
14. 設けている意味がほとんどないと思う 何のための教育アドバイザーなのかかわからない。

以上

## FD活動 行事（実績・予定）

日 程	行 事
12月24日（金）	第7回 FD委員会・FD推進連絡会議
1月12日（水）～	平成22年度後期 学生による授業評価アンケート回収開始 平成22年度 「学生が選ぶ教え上手な先生」投票開始
1月13日（木）	学生FD主催 医療情報学科ゼミ説明会
1月20日（木）	国際会議参加報告会 ① EDUCAUSE2010（米国 アナハイム） ② E-Learn2010（米国 オーランド）、 ③ ONLINE EDUCA BERLIN2010（ドイツ ベルリン）
1月26日（水）	第8回 FD委員会・FD推進連絡会議
1月27日（木）	平成22年度 第2回新任教員研修会 「本学におけるIT関連環境の紹介」
2月10日（木）	山口東京理科大学 本学のeラーニングの活用状況視察
2月18日（金）	第5回 カリキュラム・アドバイザーボード会議
2月28日（月）	金沢工業大学 本学教育GPの取り組みについて視察
3月 4日（金）	教育GP成果報告フォーラム 第1部－講演会 第2部－教育GPおよびFD活動報告
3月 5日（土）～ 6日（日）	第16回 FDフォーラム（京都）に参加 会場：京都外国語大学
3月11日（金）～ 13日（日）	学生FDサミット 学生参加（東北関東大震災で中止） 会場：法政大学
3月30日（水）	第9回 FD委員会・FD推進連絡会議

## FD委員会WGの活動実績

WG名	ミーティング
WG1（学生による授業評価アンケート）	12月15日、1月19日、2月14日
WG1（学生FDの活動）	12月 9日、12月16日、1月20日、 1月21日、1月25日、1月31日、 2月18日、2月25日、 2月26日、3月 1日、3月 4日、3月 8日、
WG2（ピアレビュー制度の導入）	12月14日、1月18日、3月15日
WG3（GPAとコンピテンシーの導入）	12月13日、1月14日、2月17日
WG4（ICTの活用推進）	12月17日、2月17日、3月15日
WG5（イベント・教育活動支援情報の企画）	12月13日、1月24日、1月27日
WG6（チュータ制度の導入）	12月 7日、1月12日、2月 9日、3月10日
WG7（ファカルティ・ポートフォリオの導入）	12月14日、1月18日、2月17日
WG8（カリキュラム・デベロップメント）	12月10日、1月14日、2月 9日、3月 9日
WG9（Own Teacher制度の導入）	12月20日、1月24日

### 編集後記

この冬は例年になく大雪に見舞われています。道路端に高く積まれた雪に視界を遮られ、細くなった道をそろそろとすれ違う自動車を目に見ていると、一刻も早い春の訪れを願ってしまいます。

教育が直面している課題は大雪の問題のように時が解決してくれるものではありません。私たちはこの難局に備え準備をしてきました。教育GPプロジェクトは終了しますが、いよいよこの難局に立ち向かうときが来たともいえるでしょう。教職員一丸となりその成果を発揮し自らの手で春を迎えたいものです。

情報メディア学部長 山北 隆典